

Galatians

多角的視点で読み解く

ガラテヤ人への手紙

そんな時、あなたはその人を
裁くことができますか

兼松 一二

楽譜「ガラテヤ人への手紙」

作詞・作曲 ジョシュア 佐佐木

特別寄稿

志に生きる著者の聖書講解書に、

志を抱き学ぶ読者の一人として

宮村 武夫

人生の分水嶺

穴澤 活郎

福音の自由から動かない人

武藤 和夫

新約聖書注解書シリーズ

しかし、本当に信じるだけでいいの
だろうか？

執筆のヴィジョン 岸 義紘

横山 英実

コミカルな視点で描く ガラテヤ人への手紙

荒木 徳之

テキスト分解シート of 解説

に想いを込めて

高清水 千秋



聖書箇所 ガラテヤ2:15～18 『福音の最大の真理 ～ 信仰義認～』

テーマ 教会の危機的状況の中から生まれた最高傑作～その1～福音の最大の真理＝【信仰義認】
手紙全体の中心テーマ『ペテロよ。バルナバよ。福音の真理ここにあり』 その2を2:19～21で展開

教会の内側から起こった最初の異端→「福音の危機・異邦人世界宣教の危機・使徒パウロ個人の危機」

「救われるためには割礼も必要」「パウロは偽使徒である」「ユダヤ主義的・律法主義的教会指導者たちからの攻撃」

パウロが手紙を書き送った背景

エルサレム教会の中に根強い勢力を持っていたユダヤ主義的律法主義的教会指導者たちがやって来て主張した2つのこと

- ①「偽りの福音」・・・キリストの恵みによりキリスト信仰だけで救われるのではなく、それとともに、割礼を受け安息日を守り、モーセの慣習を守ることによって救われる(1:6～9, 2:3～8, 16～21, 3:1～6, 4:21, 5:2～12, 6:12)
- ②「パウロは使徒ではない」使徒の条件(使徒1:21～22)【キリストと行動を共にし、目撃、キリストの復活の証人】を満たさない。それ以上に、教会の迫害者であった。→パウロの教えは正しくない→自分たちこそが正しい。

●アンテオケ教会愛餐事件 (ガラテヤ2:11～14)
ペテロが食事会(=聖餐)から身を引いていき、バルナバまでもがキツパリと同調した→異邦人教会の否定と同じ

未完了形
不定過去形
世界宣教
の危機

- ①無罪宣告...あなたの罪は赦された
- ②最後の審判からの無罪放免...一人も滅びない。裁かれぬ。死からのいのちへ

δικαιῶν

ローマの法律用語
【無罪を宣告する】
これをパウロは【救われる】という
専門用語にして①～⑤の意味内容を加えた

十字架
信仰義認
復活保証

ディカイオオー

完全・完璧な救いのパッケージ
この恵みの贈り物はただ信じて受け取るだけ

【義認】=【是認】

You are OK, I am OK.
パウロはキリスト信仰義認論の展開では専門用語
δικαιῶνを専用している
「70人訳聖書」に従った贖罪以前の旧約聖書と区別
λογίζομαι「義とみなされた」

ヤコブ2:23「正しいとみなされ神に喜ばれた」義認論ではない

パウロの激しい失望・怒り・危機感の中で

Παυλος ἀπόστολος Παυλος アポストロスと闘争的な書き始めの【聖書の心臓】と言われる教会の生命的な一書が生まれた

パウロ、使徒だ。人々からではない。人によってでもない。イエス・キリストを通してだ。それと、死者の中からキリストをよみがえらせた父なる神を通してだ。(1:1～2:10)

- 実存と根拠と連帯と(1:1～2)
 - 祝祷と頌栄・・・偉大な中断(3～5)キリスト論(4)
 - 驚き・怒り・悲しみ(6～10)
 - パウロの宣べ伝える福音の独立性と真正性の弁証(11～24)啓示による福音理解→啓示を受けてアラビアへ
 - パウロの福音の独立性・真正性・教会性＝公認性(2:1～10)啓示によってエルサレムへ
- 復活の主から受けた世界宣教の委任を果たすため
→使徒15:4～29の激論・納得・議決・報告が実現

- ③永遠のいのち...が与えられる
- ④関係の回復...神様の子どもたちにされる
- ⑤聖霊の内住...聖化開始・栄化へ前進

律法主義に逆戻りするの! まさか?!

福音の事実と 福音の真理を 鮮明にする

人間は何によって救われるのか? キリストの事実によって 十字架の贖罪と復活の聖霊	人間はどのようにして救われるのか? ただキリストを信じる信仰だけ 律法の行いにはよらない
--	--

福音の最大の真理

福音の神学 2:15～18 信じる【信仰】によって 義とされる	福音の信仰告白 2:19～21 キリストが私の中に 生きておられる
---------------------------------------	---

信仰義認

信仰聖化

テーマ ↓ 展開 義認論の説明 3:1～29	テーマ ↓ 展開 聖霊論の説明 3:1～14
---------------------------	---------------------------

福音の最大の真理の根拠【福音の事実】

神様の2つの歴史的行為 ～ 神様は派遣なさった～

- ①ご自分の御子を 贖い出すため
子たる身分を授けるため
- ②御子の御霊を 私たちの心の中に
子どもたちであるゆえに

パウロの比喩的解釈による【救済史】二者択一の解説
すなわちアブラハムは 持った 2人の息子を 4:21～31
奴隷の女ハガルから 自由の女サラから
律法主義は奴隷化へ 福音は自由解放へ

- キリストによる自由と解放(5:1～8)
- 律法主義への怒り(7～12)
- 律法精神【自由と愛】に生きる(13～15)
- 律法精神を実現する御霊による生活(16～26)
- 激励(6:1～10)
- 祈り(11～18)
- 愛をもって互いに仕えあいなさい＝律法精神2つの戒め3つの愛

16節の前半【理由】	16節の後半【目的】
知ること οἶδαの現在分詞 によって ↓ (補助動詞) 人は「律法の行い」によっては 義と認められないで 受動態現在 ただキリスト・イエスを信じる 「信仰」だけによることを	義と認められるために (目的動詞) 受動態 不定過去 不定法接続法 生涯1回の ↓ 「律法の行い」 によってではなく キリストを信じる 「信仰によって」

16節の最後【確認】

というのが「律法の行い」によっては だれ一人として
義と認められることはないからである 受動態未来形

反語解答 矛盾の指摘	17節 もし私たちが 義とされることを 求めることによって キリストにあって 私たち自身 罪人とみなされてしまうのであれば キリストは罪の牽仕者(助成者)であるのか? とんでもない。(絶対にそんなことはない!)	信仰義認? 律法主義に
	18節 けれども 以前に私が打ち壊したものを もう一度 私がそれらのものを建てるなら 私は 私自身が違反者であることを実証することになる。	

「信仰義認」救いは「キリスト信仰のみ」プラスアルファは無し。信じるだけで救われる。義とされるのだ。

福音総理解の探求

新約聖書注解書シリーズ

執筆のヴィジョン

JTJ宣教師学校 前学長
ミッション2001巡回伝道者 岸 義紘



ぼくのお母ちゃんは娘のころから宣教師の先生たちを尊敬し、ピューリタンの厳しきや敬虔主義的きよめの倫理を胸に、しかし、清濁併せ呑むような国民性で、明るく楽しく生きていた。ところが、多くの人から煙たがられ、わずかな人からは感謝されてもいた。

「〇〇さんは罪を悔い改める必要がある」「〇〇さんはサタンにやられとる」
「〇〇さんは霊的に眠りこけるとる」「このまま放つといたら、天国には入れん」
さっそく訪ね、玄関先で、ときに臨終の枕で忠告して、悔い改めを迫るのだった。

「このままでは天国から締め出されます」「再臨で取り残されます」
「神様からひどい目にあわされます」「恋愛は偶像です。幸せにはなれません。献げて下さい」

ぼくの反応。「また余計なお世話をやきよう。嫌われるだけじゃろうが。迷惑な話じゃ。そもそも『救われる』というのは、いったいどういうことなんか??」

そんなお母ちゃんの熱烈な律法主義の呪縛からの解放と自由を、ぼくは神学校時代に、「ガラテヤ人への手紙」によって獲得したのだった。

救われるという	<p>「人は律法の行いによっては義と認められず（救われず）、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる（救われる）ということがわかったからこそ（恵みによりわからされたからこそ）、私たちもキリスト・イエスを信じたのである。これは律法の行いによってではなく、キリスト様を信じる信仰によって義と認められる（救われる）ためである。というのが、律法の行いによって義と認められる（救われる）人は、ひとりもないからである」(2:16)</p>	信仰義認
こと	<p>「しかしこの私自身は、律法によって律法に対して死んだ。それは私が神様に対して生きるためである。私はキリスト様といっしょに、ともに十字架につけられた。もはやこの私自身が生きているのではなく、キリスト様が私の中に生きておられる。今、私が肉体において（この世に）生きているのは、神様のご子息を信じる信仰によるのである。このご子息は私を愛して下さったお方で、私のためにご自身を捨てて下さった。私は神様の恵みを無にはしない。もし、律法によって義（救い）が得られるのであれば、キリスト様の十字架は無駄死にということになる」(2:19-21)</p>	信仰聖化

神様に対して、聖化（イエス様のように変えられていくこと）に生きるため、イエス様は律法（主義）と罪の下にあった私たちを、ご自分の十字架とともに死を通過させ、復活によってともに生き返らせ、聖霊によって永遠のいのちを与えて下さった。信じるだけで救われる。救われた後は、信仰と恵みによる聖化の生涯が始まる。これこそがパウロの偉大な福音の真理と信仰告白だ。ぼくの長く悩ましい戦いは、まず聖書神学的に決着がついた。このことが、後に福音総理解の眼で聖書テキストを読む決定的な背景となった。

ぼくは高校受験に失敗、すべり止めの高校で数学と理科に行き詰まって1学期と1日で退学。あせりと挫折の中で十字架の愛に感動し、復活のいのちで別人のように元気をいただいて、即献身、その道に進む準備を開始した。16歳になった直後のことだった。

夢ばかり大きくて絞れず、夜間大学と神学校を行ったり来たり。26歳と28歳でそれぞれを卒業。22歳から礼拝説教を担当した。24歳で結婚。神学校の通訳と講師と開拓教会からの謝礼で生計を立てつつ、講義と説教の準備のため、生まれて初めて勉強に集中できるようになった。

35歳から「総動員伝道」を経て、巡回伝道者として独立〔ミッション2001〕を看板に掲げた。諸教会に認知してもらい、奉仕に呼んでもらうために、いろいろなテーマの本を書いた。恥も外聞もなく浅く広く書きまくった。独立・自立の自分には、他に自己宣伝・自己推薦の方法がなかったからである。伝道者として生き延びるために必死だった。

37歳のとき、高校時代からの献身の友、大川従道先生と大久保の海洋会館のレストランで、〔これからの日本宣教のためには、青年にヴィジョンを！〕で意気投合、さっそく30代の牧師仲間呼びかけ「青年宣教大会」を始めた。1000人から1500人の自称青年が集い、20年間継続した。これは一つの運動となって北海道、軽井沢、日本海、四国、西日本に地方大会が生まれ、今日なお続いているのが西日本青年宣教大会である。律法主義と福音の真理の戦いを意識したぼくは、日本の教会の刷新に向け、日曜日＝安息日＝礼拝厳守という絶対の不文律に挑戦して、2冊の本を書いた。

だれもが参加できるように、日曜日の礼拝や教会学校を、複数回に分けよう。必要に応じて、他の曜日にも分けよう。

今でこそ、多くの教会が実施していて、違和感のないこの提案は、しかし、35年前の1970年代、80年代前半においては、絶対のタブーであった。果たせるかな、ぼくの十数冊の本は全国のキリスト教書店から姿を消し、ある日、何の前ぶれもなく20箱のダンボールに詰められて、取次店から返品となった。やっと軌道に乗りかけた巡回伝道者は最大のピンチに直面した。自分の十字架を負って、暗い谷を進む40代となった。反面、実力をつけた10年でもあった。理解者・賛同者に励まされて、やがてトンネルを出る事となる。

福音の事実	十字架復活 聖霊降臨	福音の真理	イエス様を自分の罪と滅亡からの救い主と信じ、受け入れるなら、福音の事実と恵みで、100%救われる。開始される聖化の信仰生涯は、聖霊との二人三脚。	福音の最大の真理		
				信仰義認	1 罪が赦される 2 永遠のいのちが与えられる 3 聖霊をいただききよめられる 4 神様の子どもたちにされる 5 最後の審判からの無罪放免	信仰聖化
救いの福袋 (パッケージ)						

青年宣教大会運動から、同僚の先生たちの賛同を得てJ T J 宣教神学校が生まれ出た。1990年のことである。神学校創立と同時に、ぼくは本の出版をやめ、教科書の執筆に全力を注いだ。以上のような経緯をたどって、60歳代に入り、ライフワークとしての〔新約聖書注解書シリーズ〕執筆のヴィジョンへ導かれた。これは教科書の執筆から見えてきた必然的なゴールで、奇しき主の導きであった。

2016年現在「ルカ下」に取り組んでいる。分量的には新約聖書全体の3分の2を終えた。

2017年からはパウロの「獄中書簡」「牧会書簡」に進みたい。平均寿命まであと5-6年、しかし、今のままのペースで執筆と巡回伝道と講義をなお10年、継続できることを祈るばかりである。

20代から目標とした「講解説教」に取り組みつつ、「ああ、こういう注解書があったらなあ」と何度もつぶやいた。そういう注解書が、本シリーズである。

1. 説教はテキスト分解の中にある。2. 説教者と聴衆に有効性のある釈義。3. 福音総理解の眼による解釈。4. 信仰生活への適用のためのポイント。

イエス様は、その時代の律法主義と戦われた。時代の教会も、内なる新しい律法主義と戦わねばならなかった。日本の教会も、然り。これは一種の宿命である。

この律法主義から福音総理解への転換こそが、日本の教会を霊的にも、制度的にも刷新して、1%の壁を突破する鍵であると確信している。そのような福音的講解説教を生み出すための一助になること、それがこの〔注解書シリーズ〕の目指すところである。

(執筆の情熱は、巡回伝道から受けています。礼拝説教、伝道説教、伝道コンサートなど、ぜひ招いて下さい。謝礼の規定などは一切ありません。あと10年は、巡回を続けたいと思っています。)

コミカルな視点で描く 「ガラテヤ人への手紙」

作 荒木 徳之
人物イラスト 武藤 ハンナ
挿 絵 荒木 靖子



私が神学校で説教を学んでいた時のことです。講師の岸義紘先生は「たとえ大人向けの説教であっても、CSの子供たちでもわかるくらいに易しく噛み砕いて話しをください。」と教えて下さいました。

この章では、その岸義紘先生の新約聖書注解シリーズ No. 6 「ガラテヤ人への手紙」をモチーフにして、「中学生にもわかる」くらいに易しく解き明かすことにチャレンジしたものです。そのために、中学科の教師とクラスの子供たちに登場して頂き、楽しい会話の中からこの「ガラテヤ書」という難解な書物を面白おかしく解き明かしていきたいと思いません。

彼らの話す内容はこの注解書に記された内容であり、先生が配布するプリントはこの注解書をコピーしたものです。途中、あちこちに原書である注解シリーズの原文をそのまま貼り付けておきますので、子供たちの会話だけでは読み解けない部分を補って頂ければ願っています。

どうぞ童心に返り、中学科のクラスの一員になったつもりでお読み下さい。

登場人物



助丸 知蔵 (たけまる ともぞう)

本書の主人公。
中学科の教師をしているが、あることをきっかけにクラスでガラテヤ書を教える事となる。
聖書の話しを始めると止まらなくなってしまう、優しい先生。



青空 晴美 (あおぞら はるみ)

自由奔放な女の子。クラスでは良く発言をするのだが、ちょっとはずす事もあり、クラスの良きムードメーカーとなっている。妄想に走る(?)くせもあるがその発想力は他に追随を許さない。



真理 学 (まこと まなぶ)

聖書のお話が大好きな中学生。
助丸先生に憧れていて、将来は献身して牧師になりたいと願っている。
聖書の話しになると、とても中学生とは思えないような発言をする。



緑原 哀 (みどりはら あい)

晴美とは対象的に、ほとんど発言することもなく、クラスでもつまらなそうに外の景色を眺めている。
家庭環境も不明で、自分の事も話そうとはしない。
どこかミステリアスな女性である。

プロローグ

私の名前は助丸知蔵。自分で選んで助丸家に生まれたわけではないのだが、小学生の頃から「お助け丸」とからかわれてきた。知蔵も「ともぞう」とは誰も読んでくれない。

「地蔵」などと言われることもあるが、それは困る。私は物心着いた時からクリスチャンだったのだから。

今は、鎌倉駅の傍にある「雪の山教会」で中学生クラスの教師をしている。

カレンダーも残り一枚となり、そろそろアドベントの準備に取り掛かるうかと忙しくしていた時だった。廊下の向こうから「にこにこ」しながらやってくる子がいる。真理学くん。きつとまた、聖書に関して質問があるに違いない。

「助丸先生、ガラテヤ五章十二節に「いっそのこと不具になってしまおうほうが良いのです。」と書かれていますけど、どういう意味なんですか」

「……………」

「えっ！ 助丸先生でもわからないことがあるのですか」

「いやいや、どう説明したらいいのか考えてしまっ……」

つまり、「男性の大切なものの一部」を切り取ってしまいなさい。ぐらいな、とても強い口調で書かれたものなんですよ。」

「えーっ 聖書にそんなすこいことが書かれていますのですか」
学くんが驚くのも無理はない。

「パウロにとって特別な手紙なんです。イエス様の救いが「割礼」などの律法による儀式に置き換えられてしまうことの危険を、この手紙を通して熱弁しているんですよ。」そう答えながらひとつのアイデアが頭に浮かんだ。

「そうだ、今度の学びのテーマは「ガラテヤ人の手紙」にしましょう。いつものように一章ずつ読んできて、わからないことがあったら書き留めてくるよう

にしましょうね。」

「えーっ！ また宿題かよー。」

突然、後ろから声を掛けられ戸惑いながら振り返った。やはりこの子か。青空 晴美。自由奔放なんだが決して悪びれてはいない。

「明るく楽しく元気な子」とは、きつと彼女のために作られた言葉に違いない。

「ガラテヤ人の手紙はものすごくユニークな手紙なんだよ。他の手紙には無い独特の表現で書かれているものなんだよね。これぞ福音の本質というか……」

「はいはい、すけ丸先生。了解、了解。」

わかった、わかったと言わんばかりに晴美さんが私の肩をたたく。

確かに、聖書の話しになると止まらなくなってしまふのは悪いくせだ。こんなに「にこにこ」しながら肩を叩かれると悪い気はしない。

（いや違う。私の名前は「たすけ丸」だ。）

「うん、そうしたら今度、プリントを準備するね。来週までにガラテヤ人への手紙の第一章を必ず読んできてね。」

楽しそうに帰っていく生徒たちを見ながら、私の心もうきうきしていた。

そう、ガラテヤ人への手紙こそ、福音の真髄。律法学者に凜として立ち向かっていった「イエス様の心」であり、その意志を受け継いだパウロの命をかけた手紙なのだ。

第一章 SW1H

次の週の日曜日、私は中学科のクラスで用意したプリントを配っていた。

「うはっ！ これ、何語ですか??」

いつもは沈着冷静な学くんが、すつとんきような声を上げた。

（うん、いい反応だ。）

注 解

あいさつ（書き出し） 1章1—5節

- この短い挨拶は、『ガラテヤ人への手紙』全体の要約である。
ここに、全『ガラテヤ人への手紙』が浮かび上がり、『ガラテヤ人への手紙』全6章を要約すれば、この短いあいさつとなる。
- ここに打ち出されている、パウロの使徒であるという〔召命ならびに権威〕と、〔福音の事実と福音の真理に対する告白的信仰〕とは、あたかも車の両輪のように、一本の縄のように絡み合って『ガラテヤ人への手紙』を貫いている。

Π α ῦ λ ο ς ἄ π ό σ τ ο λ ο ς
Paul apostle
パウロ 使徒

- 「使徒・パウロ」ではない。「パウロ使徒」だ。順序に意味がある。

人々からではなく
人によってでもなく

- 出だしから、気合いが入っているのだ。激しい書き出しである。何かケンカ腰である。しょっぱなから、この手紙は、礼を欠くほどの自己主張である。自己弁護的である。実存的な手紙である。この手紙全体に、この「私」「パウロ」が躍り出ている。
- 戦闘的である。出だしから宣戦布告的だ。パウロの感情は激している。勢いこんで、闘争的にペンをとる。
- 明らかに、パウロはエルサレム教会の大使徒たち〔ヤコブ／ヨハネ／ペテロたち〕の弟子たちを念頭に置いている。彼らはパウロが開拓した諸教会を巡り歩いて、割礼の必要なこと、モーセの慣例を実行することが必要であることを説いて回っていた。パウロが宣べ伝えていた「キリスト信仰のみによる義認」を攻撃した。また、パウロ個人をも攻撃していた。パウロは正真正銘の使徒ではない、と。パウロはエルサレム本部教会からの公認の教師でもない、などと。
- 「私、パウロは、サウロではない、パウロだ」
「そして、私パウロは、偽使徒ではない、正真正銘の使徒だ！」
「使徒」とは、単に遣された者、ではない。

「使徒」とは／ἄ π ό σ τ ο λ ο ς /apostle

ある使命と権威を帯びて遣された使者、大使の意味である。
新約聖書では、神の福音を宣教する使命を受けて派遣された者、という
意味である。派遣する者と、派遣される者との関係がある。
「全権大使」の意味である。

ヨハネ20：21—23

使者／使徒は、任命し、派遣した人と同一人物にみなされる。

講解説教者のためのテキスト分解・注解・講解説教19編
新約聖書シリーズ No.6 「ガラテヤ人への手紙」 P29

「ガラテヤ人に宛てた手紙だからガラテヤ語だろう。中国人なら中国語で書かないと読めないぞ。」晴美さんが自信たっぷりに言うが、当然、正解ではない。

「いやー晴美さん、おしいな。でもガラテヤ人なんていないんですよ。一章の二節に書かれている通り、「ガラテヤの諸教会に宛てた手紙」なんです。新約聖書はもともとギリシヤ語で書かれていたのです。だから原文のギリシヤ語の意味を調べるといことは、とても重要なんですよ。」

「先生、ギリシヤ語なんてさっぱりわかりません。英語だって良くわからないのに。」

クラスがいつになくざわついていた。(はて、ギリシヤ語の原文を載せたのは今日が始めてだったか?)

「大丈夫。ギリシヤ語はわからなくてもいいんですよ。「ギリシヤ語ではこういう意味です」と書かれた本があるから、それを参考にすればバツチリ、オーケー、ノープロブレムです。」なんだか説明がきこえない。中学生にギリシヤ語はまだ早かったかも知れない。

「さて、本文に入っていく前に、いつものように「聖書を読み解くポイント」を揚げてみよう。」

「ハイ、ハイ、先生。5w1Hです。」元氣よく晴美さんが答えてくれる。晴美さんは本当に元氣がいい。

「では、5w1Hって何だったかな?」

「えーっと、いつ、どこで、だれが、だれと、何した?」

そこまで、突っ込まれると思わなかったのか、さっきまでの元氣はどこへとやら。それにしてもいい感じでボケてくれる。まあ、当たらずしも遠からじというところだろうか。

「うーん、まあ、そんな感じだね。じゃあ、まず、いつ書かれたか。この本によると西暦49年から53年ごろに書かれたと書いてあります。」

「日本で言えば、弥生時代のころですね。」学くんが鋭く補足する。

学くんは日本の歴史にも実に詳しい。西暦53年といえば、そう「倭」の国王が後漢の光武帝より金印を賜った、まさにその頃書かれたものだ。

「へえーそんな昔なのか。まだ石器時代の初め頃だよな。」晴美さんが考え深げにうなずいていた。(いやいや、晴美の歴史認識はどこかずれている。)

「ただ正確な年代を知ることよりもそれが「使徒の働き」の中でどの辺りに書かれたことかを知ることが重要なんですよ。」

「先生、パウロの手紙は、確か、パウロが開拓した教会が今、どんな状況にあるか心配して書いたものなんですよね。」

聖書の話になると、学くんはとてども中学生とは思えない発言をする。

「そう、ずばり、それなんです。でも、このガラテヤ人の手紙だけは他の手紙とはまったく違う、別格の書なんです。その書き出しからして異様な雰囲気をもっています。今日は冒頭の書き出しから始めて、この手紙がどれほど異質なものであったかをみていきましょう。」

5W1H?



コラム ① ガラテヤ人への手紙はいつ、どこで書かれたのか。

この件に関しては諸説があります。

まず、最大のポイントは「ガラテヤ人への手紙」二章一節のエルサレム訪問でしょう。これが使徒行伝の十一章二節の出来事なのか、十五章一節から始まるできごとなのかで大きく異なります。

「ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ。』と教えていた。」使徒行伝十五章一節。

このことを受けてパウロとバルナバと仲間の幾人かはエルサレムに上っていきます。そして激しい論争となりました。有名なエルサレム会議の出来事です。

もしガラテヤ二章一節がこの時のことを示すならば、ガラテヤ人の手紙は「エルサレム会議の後」書かれたということになります。

このガラテヤ人の手紙がエルサレム会議での決定を受けて書かれたことなのか、それ以前に書かれたのかは諸説がありそれを判断するのは大変に難しい問題です。

しかし、この手紙が「攪乱されていたガラテヤの諸教会」に宛てて福音の真理を書き送ったという事実は変わることがありません。

（講解説教者のためのテキスト分解・注解・講解説教19編

新約聖書シリーズNo.9の「ガラテヤ人への手紙」二十二ページから二十三ページより）

第二章 パウロス・アポストロス

「日本語の聖書では『使徒となったパウロ』と、とても穏やかな表現で書かれています。でも原文のギリシヤ語をみると、いきなり『パウロス、アポストロス』と書かれているのです。」

「俺はパウロだ！ 使徒である！」ぐらいな強烈な書き出しですよ。」

「おおうっ すっげー。『拜啓』なんて、書かれるよりも、めっちゃ いけてるよな。」

（晴美さん、気持ちちはわかるが、ここは大事なところなんだ。）

「そして、私が『使徒』となったのは、決して人間的な決定によるのではなく、まして『マツテヤ』のようにくじで選ばれたのでもなく、まさに『父なる神』によったのである。と非常に挑戦的な、ある意味『戦闘的』ともとれるような書き出しで始まっているのです。」

「ガラテヤの諸教会へ」と切って捨てているような書き出しも異様です。他の手紙には「神に愛されている」などの形容詞をつけて親愛の情を示しています。この手紙が教会で朗読された時には、「何がおこったのだろうか」と皆、襟を正して座り直したにちがいありません。」

ガラテヤの諸教会だけでなく、あの晴美さんまでもがきちんと座り直しているのがとても愉快だ。きっと、パウロがこの手紙を書かなくてはならなかった危機的状況を、うっすらながら感じ取っているに違いない。

「先生、でも三節から五節までは普通にもどつてますよね。」

学くんが、実心的確な質問を投げかけてくる。

「そうなんです。パウロもここで「はた」と正気にもどったんじゃないでしょうか。この部分はいわゆる「祝祷と頌栄」と呼ばれる文章ですね。でも、六節からまたパウロは「ガツン」といきますよ。」

「私は、あなたがたがこんなにも早く召してくださった方を見捨てて、「ほかの福音」に移っていくのに驚いています。と書かれていますね。もちろんほかに福音があるわけではありません。プリントを見てくださいね。ここでかかっているのは「まったく別物」という意味です。七節に書かれている「かき乱す者たち」が教会に入ってきて、キリストの福音を「別のもの」に変えてしまおうとしていたのです。」

「ここで、パウロによってガラテヤの人々にもたらされた素晴らしい救いの訪れが、「かき乱す者たち」によって破壊されようとしていました。彼らは「キリストの福音を変えてしまおう」としていたのですね。」

「パウロは憤って語ります。「たとえ「天の御使いであろうと」福音に反することを宣べ伝えるなら「その者はのろわれるべきです。」

「すげーな。「そんな奴は地獄へ落ちろー」みたいな感じだろ。」

晴美さんがまた「ちゃちゃ」を入れる。

「そうですね、実は晴美さんが言ったことは、あなたが間違っているのではないのです。ここで使っている「のろわれよ」という言葉は「アナセマ」という言葉で、最後の審判で霊魂が神から引き離されて、滅亡の中にある状態を指すのです。まさに「裁かれよ。地獄へ行け」ぐらいな勢いですよね。」

「そっかー、パウロにとっては、せつかく宣べ伝えられた福音が、「かき乱されている」ことに我慢ならなかったんでしょうね。」突然、学くんが割り込んできた。しかし、この真理学という少年。恐ろしいほどに理解が早い。

私は気を取り直してまた説明を続けることにした。

「十一節からは、パウロの宣べ伝えた福音が、「人から教えられたもの」では

なくて、実に「キリストによって啓示されたもの」であることが記されています。キリスト教を迫害していたパウロはダマスコの途上でイエス様と出会い、救いに導かれた後、誰にも会わずに、ずっとその地に留まっていました。イエス様ご自身から戴いた「その救いの啓示」を黙想していたのかもしれないね。」

「先生。どうしてパウロはヤコブ以外の他の使徒には誰も会わなかったのでしょうか？」

学くんが鋭い質問を投げかけてくる。

「そうですね、確かにペテロやイエス様の兄弟であったヤコブには会っていません。きつとイエス様がこの地上で歩まれた日々の出来事を聞いたかったのではないのでしょうか。他の使徒たちに会わなかったのは、「福音の純粋性を保つ」という意味があったと言われています。パウロはイエス様から直接に啓示を受けています。そこに人間的な要素は何も加えなくなかったのでしょうかね。」

「あつ、もう時間を過ぎてしまいましたね。来週は二章を読み解いていきたいと思えます。いつものように二章全部を読んでくださいね。」

クラスを去って行く子供たちの後ろ姿をみながら、私は少し不安になっていた。「ものの勢い」でガラテヤ書を選んでしまったものの、中学生にはまだ難しかったのではないだろうか。

しかし、そんな気持ちも、きらきらとした瞳を輝かせながら、まだ質問をしたそうに待っている学くんの姿を見ると確信が変わってくる。

(うん、これで良かったんだよね。)



驚愕	6節 Θ α υ μ ά ζ ω / サウマゾー I marvel (I wonder) 私は怪しむ / 驚いている / われ 不可解なり	
驚愕 1	こんなにも早く (そんなにも急に) (強調・文章の真っ先に) ο υ τ ο ς τ α κ ε ω ς thus quickly	急に
驚愕 2	見捨てて移っていくことに (背教・変節・裏切ること) μ ε τ α τ ί θ ε σ θ ε / 現在形 現在進行中のできごと you are removing	変節し
驚愕 3	キリストの恵みによって あなたがたを召して下さったお方から κ α λ έ σ α ν τ ο ς / κ α λ έ ω / の不定過去分詞 having called 第1の召命 (入信)	主を裏切り
驚愕 4	ほかの福音へ [別種の福音へ・別質の福音へ / まったく別物] ε ι ς ε τ ε ρ ο ν ε υ α ν γ ε λ ι ο ν into other ↓ gospel (8節 反すること)	異端へ
説明 1	7節 福音についての発展的説明 もう一つ別のもの (福音) があるのではない ο ο υ κ ε σ τ ι ν α λ λ ο which not is another	同質の福音ではない
説明 2	α λ λ ο は、同種同族の中の、もう一つ別の、という意味 another [良い仲間の福音があるのではない] (とんでもない) ある者たちがいるのだ (1) ただあなたがたをかき乱しているだけのこと τ α ρ α σ σ ο ν τ ε ς / τ α ρ α σ σ ω / の現在分詞 troubling 現在進行形中のこと (2) キリストの福音を変えようと狙っているだけのこと θ έ λ ο ν τ ε ς μ ε τ α σ τ ρ έ φ α ι wishing to pervert ↓ ↓ 現在分詞 μ ε τ α σ τ ρ έ φ ω の不定過去不定法 現在進行形中のこと / 決定的に反対のものにひっくり返す	攪乱し 福音変質を狙う連中だ

講解説教者のためのテキスト分解・注解・講解説教19編
 新約聖書シリーズNo.6 「ガラテヤ人への手紙」P47

パウロの激怒のろわれよ	<p>8節</p> <p>しかし 私たちであろうと</p> <p>天からのみ使いであろうと</p> <p>私たちが宣べ伝えた福音に反することを あなたがたに宣べ伝えているなら</p> <p>-----↓-----</p> <p>その者は のろわれよ α ν α θ ε μ α ε σ τ ω / ε ι μ ι / の命令法 3人称単数 a curse let him be のろいとなれ! ■直訳 [その者は アナセマになれ!]</p>	異種の福音伝播者への叫び
だめ押し	<p>9節</p> <p>私たちが前に言ったように 今もう一度私は言います あなたがたを受けた福音に反することを宣べ伝えているなら</p> <p>-----↓-----</p> <p>その者は のろわれよ α ν α θ ε μ α ε σ τ ω / ε ι μ ι / の命令法 3人称単数 a curse let him be のろいとなれ! ■直訳 [その者は アナセマになれ!]</p>	のろいの繰り返し
自己確認	<p>10節</p> <p>いったい (γ α ρ / ガルの二つの用法)</p> <p>今 私は 人間を説得しようとして取り入ろうとしているのか それとも 神をか・当然神でしょう・</p> <p>あるいはまた 私は人々の歓心を買おうとしているのか ・それとも 神の歓心をか・当然神でしょう・</p> <p>もし私が今なお 人の歓心を買おうとするようなら 私はキリストのしもべではないであろう</p>	ただ神の栄光のために

パウロの福音と
パウロの使徒的権威の弁明 1:6-2:14

ガラテヤ教会の混乱を悲しむ 1:6-10

6 θαυμάζω / サウマゾー
I marvel (I wonder)

我は怪しむ。

講解説教者のためのテキスト分解・注解・講解説教19編
新約聖書シリーズNo.6 「ガラテヤ人への手紙」P48より

第三章 テトスの危機

次の週の日曜日、私はプリントを配りながら、少しどきまぎしていた。注解書をこんなにコピーしてしまって、大丈夫だろうか？著作権に触れてしまう可能性はないだろうか？。そうだ、この先生には手紙を書いておくことにしよう。でも、まさか中学校のクラスでこの注解書が使われるなんて、先生もびっくりするだろうな。

「先生！」 いつものように学くんが手を上げて質問を投げかけてくる。

「……しかし、せめてプリントを配り終わるまで待つて欲しいものだ。」

「二章二節の「おもだった人たち」とはどういう人ですか？」

そ、そこか。私は一瞬たじろいだ。中学生の不思議な感性に、準備してきたセリフをあっという間に持つていかれそうになる。私は必死になってプリント目を走らせた。

「プリントにも書いてありますが、有力者や顔役、エルサレム教会の代表者たちのことですね。」私は平静を装いながら話しを続けた。

「この時、パウロはバルナバといっしょにギリシヤ人であるテトスを連れていたんです。テトスは割札を受けていなかったけど、おもだった人たちからも、ここでは割札を強いられることはありませんでした。」

「割礼ってそんなに重要なんですか？」

学くんだけでなく、クラスの皆も不思議そうな顔をしている。

「当時は割札が無ければ神殿に入ることは許されなかったのです。聖餐式にもあずかれず、礼拝の後で行われる「愛餐会」にも出席できなかったんですよ。」中学生の前では得意げに話しているが、これはすべて注解書に書かれている内容である。

「ところが四節にあるように、「忍び込んだにせ兄弟たち」によって割札が強いられる危険が迫ってきました。」

「それスパイね。女潜入スパイ「コバート・アフエア」のアニー登場よ！」

忍び込んだにせ兄弟たちという言葉に触発されて、突然、晴美さんが声を上げる。(それにしても青空 晴美、君の想像力と発想はアカデミー賞に値する。)

「ふん、甘いわね。潜入スパイは、男よ。」

普段はつまらなそうに窓の外を眺めている緑原さんの発言に、クラスが一瞬凍りついた。

「どうしてわかるのよ！」晴美さんが食ってかかる。私も答えが聞きたい。

「おフロよ、おふる。一緒にお風呂に入って割札があるかどうか確かめたのよ。」なるほど。私も思わずうなずいた。この緑原さんの名推理に、誰も二の句が継げなかった。

それにしても、「忍び込んだにせ兄弟たち」このたった十一文字でこれだけ想像を働かせることができる中学生の感性は実に素晴らしい。聖書の読み解きを教えられているのは、むしろ私の方かも知れない。

いや、だめだ、これでは今日は二章が終わらないではないか。

「ちよつと待ってね。大事なのはこの後なんですよ。この「にせ兄弟」によってイエス様によつてもたらされた「福音の自由」が脅かされ、ふたたび「律法主義」という奴隷の身分に引き戻されるどころだったんです。パウロはがんとして譲らず、おもだった人たちも「何も付け加える」ことをしなかったんですね。」私は気を取り直して一氣にたたみかけた。

「そして律法主義者との対決に勝利し、パウロは割礼を受けない者、異邦人への使徒と任命されたんだ。」

「そしてがっちり握手したんだね。」

晴美さんがまた妄想を膨らませているような、不敵な笑みを浮かべていた。

「そう、この「右手を差し伸べた。」という言葉は印象的ですよね。」

私もヤコブ、ペテロ、ヨハネという主要メンバーが、パウロやバルナバたちとがっちり握手を交わしている姿を想像して、しばし感嘆の念にかられていた。



(つづく)

コラム② 忍び込んだにせ兄弟たち

パウロたちが再びエルサレムに上った時、ひそかに忍び込んだ者たちがいました。パウロたち一行を密かに監視して、無割礼の者がいたらそれを突破口としてパウロたちを攻撃しようと狙っていたのです。救われるためには「信仰のみ」「割礼は不要である」というパウロの主張とまっこうから対立してきました。

異邦人教会にとって、律法主義の奴隷とされてしまう、いわば世界宣教の危機と言っても過言ではないような出来事でした。パウロは「キリスト・イエスにあつて持っている自由」を守るために、まさに命をかけて律法主義者たちと戦ったのです。パウロは一步も譲歩しませんでした。

「信仰のみによつて救われる。」この福音信仰が、十六世紀の宗教改革者マルチンルターの心を打ちました。あの「九十五か条の論題」を公告したのは、ヴィッテンベルグ大学において「ガラテヤ人への手紙」の連続講義を終了した直後のできごとだったのです。

(講解説教者のためのテキスト分解・注解・講解説教19編
新約聖書シリーズ第9の「ガラテヤ人への手紙」七十六ページより)

ガラテヤ人への手紙

C C/B Am F G C G

キリストイエスをしんじる しんこうによつて

5 C C/B Am Dm7 G7 C

ひとは 義と され るの です

9 C C/B Am F G C G

かみにい き るた め キリストととも に

13 C C/B Am Dm7 G7 C

じゅうじかに つけられ わたしは いき る

17 F G C F G C

いきて いるの は わたし ではなく

21 F G C C/B Am Dm7 G7 C

キリストが わたし のう ちに いきて おられ るの です

© 2016 COPY RIGHT Worship! JAPAN

これは、律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって
義と認められるためです。 ガラテヤ人への手紙 2章16節

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きている
のではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

ガラテヤ人への手紙 2章20節

ガラテヤ人への手紙の2章16節以降の、まさに
キリスト・イエスが十字架を通して私たちに与えて
下さった福音の本質そのものの御言葉を歌として、
いつも口ずさんで頂きたい、そんな想いを込めて
メロディーを作りました。

作詞・作曲 ジョシュア 佐佐木

国立音楽大学大学院修士課程修了、ヴィオッティ音楽院（イタリア）修士課程修了
元・ニュージャージー日本語キリスト教会音楽主事、元・大和カルバリーチャペル スタッフ
現在、ワーシップ！ジャパン【音楽神学校】学長、JTJ 宣教神学校 講師、
東京基督教大学 非常勤講師、東北応援団 Love East 事務局長
日本ゴスペル音楽協会 副理事長
在米日系人福音伝道協力会(JEMS)協力音楽伝道者
アチーブメントプロデュース株式会社 取締役、
CD「j-worship」シリーズ・プロデューサー（ライブ企画）
CD「Monthly Worship」、著者「グローリー・トゥ・ゴッド」（いのちのことば社）



人生の分水嶺

JTJ 宣教神学校卒業生

東京大学准教授 穴澤活郎



白か黒か

ある人がレストランでフカヒレスープを注文しました。給仕の人曰く、「大変申し訳ございませんが、フカヒレはございません。」それでは、とデザートにタピオカを注文しました。給仕の人曰く、「タピオカもございません。」帰り際にレストランの感想を求められたこのお客さん。曰く、「(タピオ)可(カ)もなく不可(フカ)もなし。」

とある会議での出来事です。一つの革新的な提案がなされました。その提案に対して重鎮のお歴々は、「なかなか良い」「悪くない」とそれぞれが肯定的と受け取れるような、それでいてあいまいな意見を述べました。特に反対意見が出ることもなく、司会者が頃合いを見て会議を閉じました。オブザーバーであった私はつきりその提案が通ったものと理解していましたが、実は廃案になっていたのです。みな提案者との軋轢を避けて直接反対はしないが、認めもしない。それで廃案だったのでした。

日本人にはことほど左様に中庸の徳を重んじる風があります。何事も白黒はつきりつけてしまうと角が立つので、グレーのまま曖昧にして事が進んでいきます。それは相手を思いやる気遣いであり、狭い島国で人々が仲良く暮らしていくための知恵でもあります。

しかし、聖書には、はっきり白黒つけなければいけないことがある、と書かれています。それは神様からの招きに応えるか、応えないか。十字架の救いを受け取るか受け取らないか。御国に入るか、入らないか。あいまいではいられないのです。どちらか一方を選び取らなければならない。私たち一人一人には、一生をかけての決断が迫られているのです。この重大な決断について、岸義紘著「新約聖書注解書シリーズ・ガラテヤ人への手紙」に沿ってほんの少しだけなぞってみたいと思います。

人生唯一の自由な選択・決断

「人は生まれながらにして自由である。しかも至るところ鉄鎖に繋がれている(ルソー)」と言いますが、私たちは自由なようであり、しかも決して思うに任せないことが多いものです。生まれる家も国も選べなければ、親も兄妹も決めることができません。家が裕福ならば、ある程度の自由がきますが、貧乏ならば、思うに任せない人生を送ることを余儀なくされます。生まれた時から私たちは決して平等ではありません。人はそれぞれに自ら努力し、周囲の助けをも求めて、人生をより良いものにしようとしています。しかし、力を尽くしても、なお時に人は、病氣、事故、災害等々、世の不条理に引き回されます。人にはそれぞれの人生行路が与えられており、その道は決して平坦ではありません。

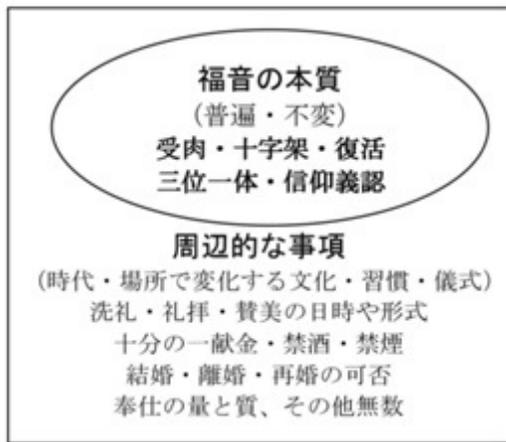


図1 福音の本質と周辺的なもの

出典：岸義紘（2013）ガラテヤ人への手紙
P.174-175 から加筆・修正

しかし、一つだけはっきりしていることがありま
す。それは、すべての人生には終わりの時が来ると
いうことです。その後、いったいどこに行くことに
なるのか。その道筋を聖書は明確に伝えていま
す。決して複雑に入り組んだものではありません。た
った2つのまっすぐな道です。天の御国か、地獄の業
火か。単純明快です。これを選びとる自由は私たち
一人一人に平等に与えられています。私たち誰もが
自分自身の意志で自由に選び取ることのできる、数
少ない決断の自由です。

天の御国に入るための唯一の道

さてその自由を行使するための判断基準ですが、
これも聖書の中に、はっきりと示されています。イ
エス様はおっしゃいました。

「わたしは門である。わたしを通過して入る者は救わ
れる。」
ヨハネ一〇章九節

「わたしは道であり、真理であり、命である。わた
しを通らなければ、だれも父のもとに行くことがで
きない。」
ヨハネ一四章六節

天の御国に入りたいならばイエス様を受け入れ
る。入りたくないならば、拒絶する。単純にして明
快です。幼子でもわかります。

律法主義者の攻撃

今から二〇〇〇年前、産声を上げたばかりの教会
でこのことをめぐって大問題が発生しました。ユダ
ヤ人信徒たちが、イエス様を受け入れた非ユダヤ人
に自分たちの習慣や宗教儀式を強制したのです。ユ
ダヤ人には守るべき祭日と儀礼、食事の種類、食べ
方などに、非常に多くの煩雑な習慣がありました。
もともとは神様からの恵みを覚えるための日であ
った安息日や、自分が神様の民であることを覚える
ための割礼もこのころには形骸化し中身の伴わな
いものになっていました。それを無垢な非ユダヤ人
の信徒に「救いの絶対条件」でもあるかのように
押し付けてきたのです。それらの儀式や習慣にはそ
れぞれの意味があり、一つ一つは紛れもなく「良い
こと」でした。それが混乱のもととなったのです。

これら「良い行い」すなわち「律法」の成就者で
おられるイエス様が来られた以上、イエス様を受け
入れる人には律法の成就者としての自由と喜びが
与えられます。ユダヤ人律法主義者たちは、この喜
びの中にいる人々を律法の呪縛に引き戻そうとし
ました。それこそ、今に至るまで私たちを縛り続け
る律法主義なのです。

イエス様が十字架上で血を流し、パウロ先生が涙
をもって書簡を書き、岸義紘先生が鼻水を流しなが
ら熱く語った、その福音をだいなしにしてしまうも
のであります。

律法主義は、誰が見ても立派な、紳士の顔をして
忍び込んできます。「伝道のために大いに献金しま
しょう」「聖霊様の宮である体を害するような酒・
煙草はやめましょう。」その主張の一つ一つは良い
もので満ち溢れています。その行いは正しいのです。
少なくとも正しく見えるのです。しかし、その「良
い行い」「正しい行為」では人は決して救われな
い。それが聖書の語るところであります。

旧約聖書には善行によって義とされようとして
失敗した人々で彩られているではありませんか。全
き正義の神様の御前にあつては、私たち欠けある人
間は皆一様に罪人であり、御前に立てる者など一人
もいません。それがイエス様の十字架の贖罪と復活
の恵みを通ると誰もが御国に入れます。救われ
るために必要なものは「イエス様を受け入れる信仰
だけ。行いは無し。」それがあまりにも素晴らしい

恵みであるがゆえに、パウロもルターも命を賭してこの福音を守るために命を投げ出したのです。

十字架の素晴らしさに比べれば、いかなる善行も塵芥にさえ劣ります。それにもかかわらず、律法主義は「良い行い」をあたかも「十字架と復活」に比肩するかの様に救いの条件に付け加えて十字架の恵みから人々を引き離そうとします。「良い行い」にどのような絶対性や普遍性があるというのでしょうか。すべては相対的なものであり、時代と場所によって変化していくものに過ぎません(図1)。

これに対して、イエス様の受肉、十字架による罪の赦し、復活の恵み、聖霊降臨といった、福音の中心的要素は、私たちの善行などでは到底及びもつかない、絶対的なもの、普遍的なもので満ちているではありませんか。

「救いは信仰だけ。その他は一切なし。」
「一切なし」といったら「一切なし」です。

「千丈の堤も螻蛄(ろうこ)の穴を以て潰(つい)ゆ(韓非子)」と言うように、少し油断してわずかに一つ余計なものをつけ加えると、堰を切ったように余計なものが怒涛のように流れこみ、大切な真理を一気に押し流してしまいます。救いか、滅びか。まさに永遠の生死を決める分水嶺。いのちか、滅びか、ほんのわずかな差で決まります(図2)。

「信仰だけ」に生きるか「ほんの少しばかり良い行いを付け加えるか。」決して過ってはいけません。それがガラテヤ書にこめられたパウロの思いでした。

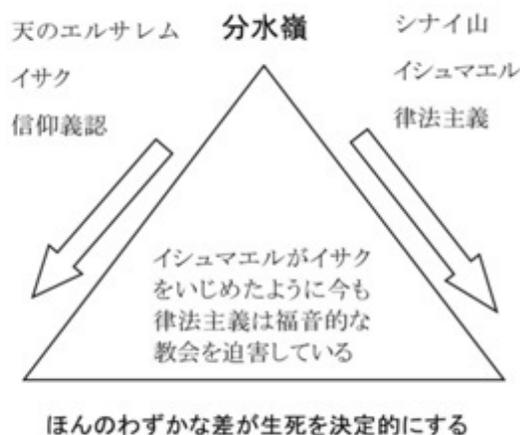


図2 人生の分水嶺

出典：岸義紘(2011) JTJ 宣教神学校ガラテヤ講義

パウロの比喩的解釈(ガラテヤ 4:21-31)

今のエルサレム
 奴隷の子：イシュマエル
 シナイ山
 キリスト教的律法主義
 天のエルサレム
 約束の子：イサク
 信仰義認
 背景：律法主義者との激烈な戦い
 ペテロ・バルナバのつまずき

 イシュマエルはイサクをいじめた！
 今も律法主義は福音的な教会を迫害し続けている！

挑戦的な書・過激な著者？

ガラテヤ書は極めて挑戦的で戦闘的な書物とされますが、人々の永遠の生死を決定づける問題だからこそ、パウロは律法主義を排除するために過激にならざるをえませんでした。ところで「20代にもなつて過激であらぬ者は感性が足りないのである。30代になつても、まだ過激であり続ける者は知性が足りないのである(岸義紘(2011) JTJ 宣教神学校講義中の発言を徴修正)」と申しますが、岸先生が過激な言動と行動を開始したのは御年40代から。岸先生の知性と感性の評価は余人に譲るにしても、過激とも言われる先生の言動・行動を裏打ちする思想体系は、決して新奇なものでも過激なものでもありません。

二〇〇〇年も前にパウロが、何百年も前にルターが、ウエスレーが、繰り返し述べてきた福音の本質です。

「信じるだけで救われる。プラスアルファは一切なし。」

誤りなく御言葉を伝える重責を担う説教者のために、老いてますます過激な岸先生が心血注いで聖書の真髄をまとめ上げた「新約聖書注解書シリーズ・ガラテヤ人への手紙」。ほんのさわりをなぞつてまいりましたが、一度お手にとつてご覧になられてはいかがでしょうか。

しかし、本当に信じるだけで

いいのだろうか？

JTJ 宣教神学校

学長 横山英実



青年宣教大会を始め、JTJ 宣教神学校を創設された岸先生が、ライフワークとして取り組んでおられる「福音総合理解」に立った新約聖書注解。

どれもが、信徒にとっても、説教者にとっても、新約聖書原文を見ながら、福音の真理に光を当てた作業は、必ず大きな示唆を与えてくれることとなる。

「しかし、人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる」 ガラテヤ書2章16節

とあるように、ローマ書と並んで、ルターが「信仰義認」に目覚めた書として有名である。当時の教会制度にプロテスト（抵抗、反抗）して、福音に立つ立場を明らかにし、その後の福音主義教会のもととなっている。

「信仰のみ」「恵みのみ」「聖書のみ」という宗教改革は、まさにガラテヤ書の真髄である。

「主イエス様を信じる信仰によって救われる」という福音の原則。

しかし、本当に信じるだけでいいのだろうか？

もっとちゃんとしなくては救われたことにならないのではないか？

せめて、クリスチャンらしい生活をしてはじめて救われるのでは？

そのような思い、疑いは常に出てきては信仰者たちを迷わせる。

「主イエス様を信じることは大切だが、それだけでは不十分だ」という教師たちが、どの時代にも出てくる。それは、21世紀の現代でも例外ではない。

そのあたりのことを、岸先生の注解書を通して詳しく学ぶことができる。

また、JTJ 宣教神学校にて、「福音総合理解」や「ガラテヤ書」、そのほかの講義を学ぶことができる。どこに住んでおられても、インターネットやDVDで岸先生をはじめ様々な先生たちの講義を学ぶことができる。「善は急げ」で、思い立ったら、是非、この機会に、気軽に学校に問い合わせしてほしい。

聖書の学びがあなたにとって、喜びとなり、楽しみとなるように祈りつつ

特別寄稿

志に生きる著者の聖書講解書に、 志を抱き学ぶ読者の一人として

宇都宮キリスト集会牧師、ちいろば聖書集会牧師

名護チャペル協力宣教師

クリスチャントゥデイ編集長

宮村 武夫



今回、紹介する光栄を与えられた岸義紘先生の『ガラテヤ人への手紙 テキスト分解・注解・講解説教』の特徴を一言で言えば、志に生きる者の聖書講解書です。

この場合の「志」とは、ピリピ2章13節、「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです」で明示する、祈りを通して父なる神ご自身が祈り手のうちに与え、事を行わせる志です。

ですから、本書を購入し活用する読者も、同じく志を抱きつつ著者である岸先生と共にガラテヤ人への手紙を自分自身も読み続ける覚悟を迫られるのです。これこそ、本書の「おわりに」において岸先生が明言している、J T J 宣教神学校の卒業生をはじめ、本注解書を用いる者が「じっくりと『ガラテヤ人への手紙』を学んでもらう」との目的にかなう応答です。その営みの中から、「主イエスさまから委ねられた会衆の期待を裏切らない、良く整えられた、優れた講解説教が産み出されますよう」にとの岸先生の祈りが時の経過の中で成就していくに違いありません。

本注解書の「もくじ」に見る三部構造において、本書の特徴が明らかです。

第一部「全体を知るために」、第二部「テキスト分解／注解／講解」、第三部「講解説教」。第一部の表題に含まれている「全体」に意を注ぐ必要があります。

す。第一部はさらに4つの小項目に分かれています。1 中心テーマ、2 アウトライン、3 パウロの論旨、4 執筆の背景。そうです、岸先生は、ガラテヤ書で何が中心テーマであるか、その主題をはっきりと把握なさっています。さらに、その主題が、手紙の中でどのように展開しているか、ひたすらテキストに聴従しながら主題を心に焼き付けているのです。

このひたすら受け身の営みを通し、なぜパウロがガラテヤ人への手紙を書いているのか、パウロの心のマグマに触れ、同じく心燃やされながら、本書の細部に至るまでテキストに聴き切るのです。understand、テキストの下に身を置く道です。これこそ、理解への道です。この道を岸先生ご自身が歩まれ、本注解書を用いる私たちに同じ道を歩むように招いておられます。

聖書テキストの下に自分自身の生活と生涯を徹底的に置き、聴従する。あの有名なだれだれさんが、この高名な学者がと次から次の引用ではないのです。俗な表現を用いれば、「人のふんどしで相撲を取らない」、「一寸の虫にも五分の魂」。自分の目、自分の頭、自分の心を注いで聖書テキストに全力で聴くのです。本注解の初めから終わりまで一貫している特徴は、この基本的態度です。その特徴が最もよく提示しているのは、本書377～395ページの「講解説教のための各章の分解」です。これは、本講解書でも特に大切な箇所と理解します。

この部分に凝縮、提示されている成果は、小学校上級の国語のクラスで私が担任の教師から学んだ文章を素直に読む、ひたすらに聴く営みを通して把握されたものです。誤解を恐れないで言えば、ギリシャ語や歴史的背景など、専門的な知識がなければ得られないものではない。主の御声を聴きたい、聴いて従いたい、従って生活し生涯を送りたい。その心と生活と生涯から、主の御言葉をなんとか伝えたい、この志を持つ小学校の国語教育を受けた者全てに開かれている普通の道です。

この道を日々に生涯の終わりまで歩み切る志を持つ者にとって、ギリシャ語や歴史的背景など専門的な知識は、「鬼に金棒」的な役割を果たすに違いありません。そのためにこそ、本注解書は有効と判断します。

本書の「はじめに」を見ると、岸先生の生活と生涯が率直に語られています。この自らを注ぎ込む基本的な態度は、248ページ以下の第三部「講解説教」においても全く同じ、いやさらに徹底しています。岸義紘ご自身の存在を離れて「はじめに」も「講解説教」も成り立ちません。本書に学ぶ者も、全く同じく自らを注いで聖書の下に身を置く覚悟を抜きに、本書を自分の目的、たとえそれが説教をつくるという一見良い目的のように見えても、利用することはできない。本書は、まさに志と志の間にのみ伝達される類の書です。そうした書として推薦します。

著書の紹介

宮村武夫著作 全8巻 四六判 定価 1800円

- ① 愛の業としての説教
- ② 礼拝に生きる民
- ③ コリント人への手紙 第一
- ④ テサロニケ人への手紙 他
- ⑤ 神から人へ・人から神へ
- ⑥ 主よ、汝の十字架をわれ恥ずまじ
- ⑦ 存在の喜び 「もみの木幼稚園の十年」
- ⑧ ヨハネに見る手紙牧会



ルカの福音書 味読・身読の手引き ①～③
定価 各700円＋税
発行：クリスチャントゥデイ



発行者：
**宮村武夫著作
刊行委員会**
発行所：
株式会社 ヨベル

◇宮村武夫

1939年東京深川生まれ。
日本クリスチャン・カレッジ、ゴードン神学院、
ハーバード大学（新約聖書学）、上智大学神学部
（組織神学）修了。
宇都宮キリスト集会牧師、沖縄名護チャペル
協力宣教師。
2014年4月からクリスチャントゥデイ編集長。

「福音の自由から動かない人」

単立 十字架福音キリスト教会牧師

J T J 宣教神学校 説教学「講解説教」講師

武藤 和夫



ガラテヤ人への手紙一章から四章で、「信仰義認」を論じたパウロは、後半の五章から六章において、「ならば私たちはどのように生きるべきか」、その実践を教えています。すなわち、信仰義認の結果を教えているのです。今日の聖書の御言葉で表すならば、それは「解放と自由」です。

ポイント① 自由解放宣言

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました」。ガラテヤ人への手紙五章一節

ここで使われている「解放してくださいました」という言葉は、歴史的事実であることを強調した宣言です。クリスチャンとはイエス様によって、闇の子から光の子へ、悪魔の支配から解放された者たちです。救いはイエス様の十字架と復活によって、すでに完成されました。今まで罪と死と律法に縛られた世界からようやく解放されたのに、また奴隷のような状態に戻りたいと思う人がいるでしょうか。もしもそれを願うとしたら、「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」(四節)とパウロは言います。では、私たちはどうでしょうか。律法主義的となり、キリストの恵みから落ちそうになってはいないでしょうか。恵みから落ちると、キリストの救いとは無関係になってしまふことを意味します。私たちは主の十字架の前で罪を悔い改め、イエス様の救いを信じ、受け入れ、主からの赦しをいただき、このパウロの自由解放宣言のように、「私はイ

エス様によって自由と解放を得ました！」と確信をもって、神様と人との前で宣言できるでしょうか。パウロは大胆に自由解放宣言をしました。今度は私たちがイエス様によって自由にされたこと、解放されたことを宣言する番です。

ポイント② 二つの奨励

パウロは一節で、二つのことを奨励しています。その一つ目は、「しっかりと立ちなさい」(口語訳では「堅く立つて」ということです。「しっかりと立ちなさい!」「堅く立ち続けよ!」この箇所からは、「クリスチャンたちよ、主イエスによって自由と解放を得たあなたがたは福音の上に堅く立て!そこに立ち続けよ!」というパウロの熱い叫びが聞えてくるかのようです。信仰によって義とされた人ならば、救われる以前の世界がどれだけ虚しかったかを体験済みはです。私たちはこの信仰義認という土台の上に、今もしっかりと堅く立ち続けているでしょうか。二つ目の奨励は、「またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい」ということです。先ほどの「しっかりと(堅く)立つて」という言葉と、この「負わせられないように」という言葉は、両方とも現在命令形が使われており、

今まで通り、一生の課題として、気を抜かずに継続せよ」と強調されている言葉です。パウロはかつて教会を迫害していた人でした。それまでのパウロは、「八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるどころのない者」（ピリピ三章五―六節）でした。以前のパウロは「くびきを負わされていた」状態だったので、罪が赦されたという確信や喜び、解放感はありませんでした。そのパウロがここで、律法主義に戻ろうとする人々に対して、最大級に重要なことを伝えるのです。それは「この信仰による救いから離れるならば、あなたがたは再び律法主義の奴隷のくびきを負わされることになる」というものでした。これはガラテヤ教会の人々に対してだけでなく、聖書は今日も生かされている私たちに対して、同じ言葉をもって警告しているのです。

「奴隷の轡に二度とつながれてはなりません。」（新共同訳）



「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。」ガラテヤ人への手紙五章二節

ポイント③ パウロの警告

「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。」ガラテヤ人への手紙五章二節

岸義紘先生の著書「ガラテヤ人への手紙」の注解書の中にはこう書かれています。「救われるために割礼を受けるなら、サラの流れではなく、ハガルの流れに身を置くことになる。割礼を受けるなら、祝福の外、約束の外、律法主義の奴隷の流れに入る。「割礼を受けても、あなたがたは救われない。」 気合いを入れて、覚悟を決めて、パウロは叫ぶ。割礼の民、契約の民ユダヤ人には、これは断じて許せない暴言である。パウロは厳しい迫害を覚悟しなければならぬ。救いの条件の中に割礼を入れるのであれば、割礼は、絶対に「ノー」である。キリストの十字架の信仰だけで、恵みにより、完全に、私たちは救われるのであるから、割礼は、キリストの救いを、不完全なものにしてしまう。キリストの十字架の死を、犬死にしてみよう。キリスト信仰+割礼で救われるのではない。これは福音の真理を否定する異端である。」（注1）

パウロは福音の真理を守るためには、逃げも隠れもしません。これはまさに殉教覚悟の宣言なのです。パウロはこの手紙全体を通して、「人を救って義とするのは律法主義ではない！福音である！」と声を大にして叫びます。パウロにとってこの律法主義と信仰義認の問題は、決して妥協することができない信仰の大きな戦いでした。なぜなら、この信仰義認の教理には、キリスト信仰の土台と、人間の魂の救いがかかっているからです。そのため、パウロは今日、私たちの想像をはるかに越えた殉教覚悟の思いで、この「自由解放宣言」をするために立ち上がるのです。

私の両親は、耳が聞えない「ろう者」です。兄と私が生まれた頃、父の実家の人たちから、「子供たちを預けなさい。耳が聞こえず、話すこともできないお前たちが子供たちを育てられるわけがない。第一、どうやって言葉を教えるのか？ この子供たちが将来、しゃべれない子供になってもいいのか！」と言われました。けれども父の実家の人々は熱心な仏教徒でした。「もしも子供たちを実家に預けたら、イエス様を知らないどころか、偶像を拝む子供たちになってしまふ。確かに私たちは子供たちに言葉を教えるあげることではできないけれど、神様が必ず助けてくださる！」両親はそう信じて断り続けました。

ある日、親戚の人々が、「今日は何としてでも子供たちを預かって行くぞ！」と意気込んで来たとき、母が父に手話で語りました。幸い、あちらは手話ができないので、彼らの目の前でも堂々と内緒話ができるわけです。「お父さんが彼らの気をそらしててください。その間に私が信夫と和夫を連れて裏口からそっと逃げます。そしてあの友達の家（当時の我が家から何キロも離れていたところ）に隠れていますから、おじさんたちが帰ったら迎えに来てください。」

でも母は昔から肺病や腎臓病を患っており、医師から激しい運動をしてはいけないと注意されていました。ですから父が心配し、「それではお前の身体がどうなる。逆にしよう、私が子供たちを連れて行こう」と提案しましたが、母は「もしも逃げる際に物音がして気づかれたら、私のこの細い体ではおじさんたちをつかまえておくことができません。やはり私が行きます！」と押し切り、ついにそれが実行されたのです。母は細く病弱な身体なのに、兄を腕に抱き、背中私をおんぶして、裏の勝手口からそっと逃げ出し、何キロもある道のりを全力で走って逃げてくれました。しばらくしてから三人がいらないことに気づいた親戚の人々は、両親の決死の覚悟に胸を打たれ、「そこまでして自分たちの手で育てたいのなら、もう好きにさせてやろうじゃないか」と諦めてくれて、私たち兄弟はクリスチャンである実の両親のもとで育てられることになったのです。

あの日、親戚の人々から「しゃべれない子になったらどうする！」と言われた子供たちは今、二人とも牧師となつて、毎週講壇から神様のみことばを取り次いでいます。

たとえ耳が聞えなくても、言葉を話せなくても、両親は信仰と命をかけて私たち兄弟を守ってくれました。そして今日の私たちが存在しています。もしも、そのことを忘れて、まるで自分たちの努力だけで生きてきたと思うなら、これほど親不孝なことはないでしょう。十字架でのちを捨ててまで私たちが愛し、救ってくださいだったイエス様による救いではなく、律法によって救いを得ようとすることは、親不孝ならぬ、最大の「神様不幸」になるのではないのでしょうか。この救いは、律法や割礼では決して得ることではできません。

私たちは、パウロがここで宣言したキリストによる福音の自由と解放宣言から動いてはなりません。この信仰義認の土台の上しっかりと立ちましよう。堅く立ち続けましよう。この信仰による救いこそ、私たちのために神様がくださった完璧な愛の贈り物なのです。

私たちも、信仰義認による自由解放宣言、しっかりと堅く立ち続けること、またと律法主義の奴隷のくびきを負わせられないようにしつつ、信仰生活を歩む者となりましよう。

「律法には救いはない！ 福音にこそ救いがある！」。パウロがガラテヤの教会へ、そして全世界に向かって力強く訴えるのは、この福音による救いなのです。

脚注

1 岸 義雄 『ガラテヤ人への手紙』

(J.T.J宣教神学校、二〇〇八年) P.188



そんな時、あなたはその過ちを犯した人を裁くことができますか。

ガラテヤ人への手紙 第六章 講解説教

友愛キリスト教会牧師

兼松 一二



この助け主とは、真理の御霊です

ガラテヤ人への手紙第六章を読む時、私は、ヨハネ一七章のイエス様のお祈りを思い出します。

「わたしは、もう世にいません。彼らは世におりますが、……わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いします」

さらに、一六章
「わたしが去って行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします」

この助け主とは、真理の御霊です。
イエスさまは、現在、十字架にかかり死んで後三日目に復活し、継いで父

なる神様の許におられます。

このイエスさまに、確かに悔い改めている人に、そして「イエスさまは私のためにかつて十字架にかけられた」と信じ続けている人に、新しい心が造られています。

この事実を確かに持っていて、ガラテヤ六章を読むとき、途方もない豊かな取扱いを主からいただくでしょう。

六章の全体の分析、また区分における要点の突き方は、岸義紘先生の「ガラテヤ人への手紙」注解書が、とても有益です。原典から汲み取る恵みを鮮やかに示してくれます。この本には、多くの宝があります。ぜひ御利用ください。

ところで、この六章一〇節は、五章一六、二五、二六節と密接につながっています。「御霊」ということです。

第六章一節で「御霊の人」「心」八節「御霊」が二度、原語でブネウマが用いられています。

つまり、この区分ではキリストを信じている人に働く御霊が、いかに力をもっているか、信じている人たちが、自覚しなければならぬことを示しています。

御霊の人

十字架、復活、父の右に座すキリストが遣わしている御霊は、信仰者の現実を良くしていくように働きかけています。そのことを強く鋭く自覚しなければなりません。キリストを信じている人は、御霊の人です。

自分は、ここに立っていると自覚し、現実的にめざめていかなければなりません。

御霊によって生きることの原動力としていくとき、御霊がその人を導き、実も結ばせてくれます。現実的にめざめさせるために、いくつかのことが命令形で示されています。命令形は、「こういう時はこうしなさい」という命令の内容もあれば、「上に立つ人が仕える人に指示を出す」という内容もあれば、「こんなことはあつてはいけない」という勧告の内容もあり、励ましていく奨励の内容もあります。文脈からして一〜三節は、他人の重荷を負うように命令されています。



「正してあげなさい」

私たちは他人と関わりをもたない生き方を生じてはいけません。むしろ他の人の力になる様な生き方を採りましょう。例えば、ある人が過ちに陥った時です。この「過ちに陥った」と記されている「過ち」は、パラブトーマといい、意図的に犯した罪ではなく、「凍結した道」とか、「危険な小道を踏み外してしまった」という失態です。

そんな時、あなたはその過ちを犯した人をけなすでしょうか。

あるいは、過ちは罪を犯すことで、罪を犯した人と関わることは、自分の不名誉につながると判断して、その人から離れるようにするでしょうか。

いいえ。御霊をいただいているあなたは「正してあげなさい」とあります。

「正す」という原語はカタルテゾーで、「修繕する、回復してあげる」という意味があります。人間の体内にある腫瘍を除去するとか、骨折した手足をさせるように回復してあげる外科医の仕事をさしています。

要は、あやまちを犯した人を懲らしめるのではなく、癒していくことが強調されています。

人を正し、癒していく関わり方をしましょう。正していく関わり方をするには、他人の重荷を負うことでもあるでしょう。そのような場合は、キリストの愛のルールを全うすることもありません。また、愛の人は自分自身に気をつけていくことが必要です。

たとえ私たちはキリスト者であるとは言え、自分は罪の性質をもち続け、善を知っていても行うことができないことを何度も感じて、くやしい思いをもってきている者です。しかも地上にある者は、自分で自覚していませんが「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」の傾向があります。見ていてすぐ判るじゃありませんか。

「このようなことはある状況のもとで、あらわになつてきます。」

そういう自分であることを、御霊は私たちキリスト者に親身になって指摘しています。

「自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。りっぱでもない自分を何か（あの人のようには失敗しないと）思うなら自分を欺いているのです。自分の行いをよく調べてみなさい」と。いつも自分の心を見張り、自分の思いと行いを御言葉により吟味することは賢明なあり方です。

五節の「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷がある」は、二節の「互いの重荷を負い合う」と結びつけて考えると、自分をしっかりさせなければならぬことを気づかされます。他人の重荷を負おうと、他人と親しくやさしい関わり方を

しても、他人のすべては負えないものです。自分の重荷は他人では負えない部分があります。私の妻は、痛みの伴う病気をかかえています。私がそれを負うことはできません。その逆もあります。他人が私に代って果たすわけにはいかない苦しみ、義務、責任があります。

その時に私たちが知るのには「このことは私が私であり、私を他人に取り替えることができない」という事です。



六〜一〇節には「よいこと、善を共有していくこと」が示されています。

六節では、教役者への物的支援が示され、一〇節では信仰の同胞への多様な配慮が必要であると示されています。

私たちは自分の持ち物をどのように用いるかにより、自分の心や性質や度量、そして自分の立場をどこにもっているかが証明されてきます。

毎月の収入が三十万円もあるのに、たったの五千円しか月定献金をしないとしたら、その人をどう理解するでしょう。

「肉に蒔く」とは、神様が私に与えた富を利己的に受けとり、神様と御言葉を二の次にするあり方です。

「霊に蒔く」とは、自分の富や財を神様の御言葉によって理解し、評価して、御言葉が命じていることに服従して献げていくことです。

この様に主に軸足を置いて、物やお金を必要なところに役立てていきましょう。よいこと、善を行うときの心得として、その時、その場限りの善ではなく、継続的になしていく時、善行の効果が現れてきます。

善いことをしても、中々よい結果や効果を体験できないものです。

農業に従事する人たちは、一粒の米でも、百俵の米でも量にかかわらず、丸一年かけて刈り取るのです。

物質でさえ、それほどの期間を要するのですから、人格面や信仰面での収穫には二十年、三十年もかかることを心得なければなりません。

ただ善い種、福音の種を蒔いていけば、永遠の生命を与える信仰を生じさせてくださると、御霊は語ります。

自筆の追伸

パウロは手紙を書く時、口述してきたようで、一節から自筆で追伸を書くと言っています。それは心からの親しい挨拶を述べるからではなく、この手紙を書いた大切な理由と、この手紙の内容がガラテヤ教会の大問題を正すものにならないければいけないという固い決意を表すためです。

一二、一三節で、キリストを信じる者への敵の動機を暴露しています。

「人は神様に救われるためにどうすべきか」ということについて、敵なるユダヤ教主義者は「割礼を受けるべきだ」と言う。彼らはガラテヤにあるキリストの教会に入ってきて、割礼を受けることを強制し、しかも、しつこかったのです。



ユダヤ教はキリスト教と連続性をもっている部分もあり、類似性もあり、共有部分もあります。

しかし、キリスト教はユダヤ教と、全く断絶し、全く異なり、全く「新しい」(一五節)ものです。キリスト教は、神様に救われるためには「イエスを神様とし、救い主として信じることにあ

る」とし、現にそう認め信じています。それにしても何故、敵は割礼を強制し続けているのか。

それは、改宗者を獲得したという「誇り」をもちたいようです。

この誇りは自分の功績を自慢することで、そういう手柄を立てた自分に酔いしれたいのです。これは肉的な誇りです。

イエス・キリストの十字架を誇る

キリスト者は一四節で「イエス・キリストの十字架」を誇る。何故。

イエスさまが十字架の苦しみにより私の罪を赦し、死んで葬られ、復活して「主」であることを顕わしたのは、私たちが最も恐れる「死と死後のさばき」を克服し、勝利したことを証明しています。

私たちは御霊によって、このことを確かに理解し、ここに希望を抱くほどに至っています。この尊い価値あることを私のものとして下さったイエスさまを、私たちは誇りとしています。

イエスさまの十字架の身代わりの死は、私の過去の罪と、今の罪、そして全生涯のすべての過ちを赦し、私の死後、神様の御前で「さばきの時に至るまで贖罪的効力を持っています」。

この理解をもってイエスさまを信じていることは、私たちの現実どんな意味と力をもっているのでしょうか。例を言いますと、ある六十代の方が出世コースを通り、もう現役の完遂という矢先にガンが見つかった。恐怖のどん底に落とされたのです。毎日の不安に耐えきれず私の所に來られた。

私は「人は誰でも一度死に、死後、神様のさばきを受け、罪の解決のない人は永遠にもだえ苦しみ、痛む。しかし、イエスさまによる罪の赦しを

戴いている人は、死後のさばきの後、神様の許で快く健康で生きるのです。

そして今から国籍を天にもつのです。この天に国籍をもつ人にとって、地上の苦しみは天に入る準備として与えられていくのです。」と話した。

彼は「イエスさまを信じます」と言ったその時から、自分の現実と取組んだのです。イエスさまの十字架の贖罪の力は、地上のことで悩みがちな私たちの魂に乗り越える力を与え、天上にまで引き上げていきます。

イエスさまを信じて生きるということは、この世で苦しむだけでなく、悪い事にも出会います。悪質な苦悩や苦痛を与えられて生きねばならない時もあり、異教的な事でも非難されることがあります。

しかし、キリストとの密な関係をもって生きていると、人の権力、世の権力は私の魂を支配することは出来ないのです。

これが一四節の「世界は私に対して十字架につけられた」という意味です。

新しい創造

一五、一六節で重要な事がまとめられています。十字架は、罪ある私たちをみじめさから救うものです。それに十字架は私たちが「新しく創造」してくれます。

私たちが主を信じる動機は、罪で崩れる自分を改善するためとか、みじめな自分を復興するためと思ってきました。しかし主を信じて分かったのは、信じた時、主は私を全く新しい人に創造して下さった事です。

生きる原動力は、私の意欲でなく聖霊が我が内に働いている事です。また主を信じる私は、私のものでなく、主のものである事です。主は、私に主の平安とあわれみを賜る生涯を歩ませて下さいます。

これは途方もなく「大事」なことです。

私はよく「私は日本人キリスト者です」と言います。パウロは「私はイスラエル人」とよく言います。だが、「神様のイスラエル人」であること深く自覚した上で、言っている事を見失ってはいけません。



イスラエル人は過去、契約を結んだしるしとして割礼を受けました。その古い時代にあつては割礼も意義はあつたでしょう。

しかし、主イエスさまが顕れてから、変化がでてきました。

神様の最終的かつ決定的な恵みは、御子イエスさまの十字架を自分のため受け取る者を、新しく創造する中に表わされていきます。これを基準としていく人は「神様の真のイスラエル人」です。

最後にパウロはこう叫んでいます

私は狂わんばかりに、このイエスの十字架の事を宣教してきましたが、無理解な人は私をムチで打って、私に傷跡があります。しかし、これは私が主の者であるという焼印です。

「これからは、だれも私を煩わさないようにしてください。」

私は、この身に、イエスの焼印を帯びているのですから。

どうか、私たちの主イエス・キリストの恵みが、兄弟たちよ、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。」

テキスト分解シートの解説に想いをこめて

単立 ふじみ野キリスト教会 伝道師 高清水 千秋

荒野で叫ぶ者の声とする。
『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』

岸 義紘先生が、喜びと楽しみをもって
最優先で書き続けておられる「注解書」の扉を開けると
その声が、心の中に響いてくる。

小さい頃から活字を読まない、読めない私が、
なぜ、岸先生の注解書だけは、スラスラ楽しく読めるのか。
ずっと考えていた。

私は、ものごとを、絵的に、音的に、頭に心に、焼き付けるらしい。
岸先生の紡ぐ文章は、心地よい音とする。

心の臓に響き、琴線に触れ、
私の鼓動にコラボする、岸先生の「いのちの音」。

トントントン 奏でる音を
トントントン 積み木のように エクセルで
聖書のお言葉 解き明かされた注解書
そのお言葉を シートの上に 置いていく

説教1本ワンシート
テキスト分解 そのまんま 釈義と解釈 きっちり
適用ヒントが ぎっしり詰まった ワンシート

イエス様のメガネをかけて
イエス様は どう言われているのか
イエス様なら どうされるのか
それが「福音総合理解」
それが「岸 義紘先生著・注解書シリーズ」の髓の髓

出来上がった各シート 全部集めトントンすると
聖書66巻の「聖立方体」
変幻自在なルービックキューブが出来上がる

岸 義紘 先生がお書きになっている注解書が、教科書としても使われている JTJ 宣教神学校で、私は聖書の学び方を教えていただきました。

JTJ 説教総合学のご指導は「世界規格の説教で講壇に立たせていただく」こと。

「岸 義紘先生著・注解書」から1枚の説教メモをエクセルで作リ、そのシートを持ち歩いたものです。この1枚の説教メモ「テキスト分解シート」は、今もライフワークとして作り続けております。

(「テキスト分解シート」は、表紙と裏表紙の裏の部分のカラーページに掲載しております。)

*編集部 注

やがて来る リバイバル。
先に 救いの恵みに与った 世界 すべてのクリスチャンは
永遠のいのちへの水を 求めてどんどん押し寄せる 渴ききった魂に
主の御ことばを 正しく語り告げなければならない。
あなたも わたしも
アピース オブ ペーパー 片手に 足音軽く 飛び出して
巡り歩いて 主の御ことばを 語る時がやって来る。

備えよ
主に召された者よ
その召命に応えよ
使命に立ち上がれ
任務を全うせよ

備えよ
あなたに託された主の御ことばを
語り伝える手段をもて

荒野から叫ぶ声が
わたくたちの眼に 耳に 頭に 心に 突き刺さり
わたくたちを 突き動かす。

机に向かい
聖書と注解書を開いた
その時
静寂の中で その声を
わたしは 確かに聴いたのだ。

心からあなたにお薦めします

マウント・オリーブ・ミニストリーズ責任者

J T J 講師 ハワイ在住

中野 雄一郎

「聖書を読むあなたの悩みを解決してくれる注解書！」

「牧師の説教に、助けになる注解書！」

「一般信徒、CS教師、個人で聖書を学びたい人も！」

岸義紘先生は、私の四〇年に及ぶ伝道の親友で、現役の巡回伝道者。また礼拝説教者としても世界を駆け巡って、半世紀！

その先生が精魂込めて書き続けている、新約聖書注解シリーズ。わかり易く、福音総理解に立ち、テキストの釈義もていねいで親切です。

かつて、マルチン・ルターが原語で聖書を読んでいたとき、宿に同宿していた、二人の修道士が、「あのように原語で読めたら指一本を切り落としても構わない」と言ったとの事。

この注解書を読むなら、あなたは指を切り落とす必要はありません。ギリシャ語の動詞の時制と意味、単語の原意など、説教に役立つものはみな説明しています。

日本人説教者が日本人説教者のために書いているこの注解書全巻を、あなたの書棚に揃えられることを心からお薦めします。

牧師が薦める

この1冊



福音総理解の眼で

各節・各章・全体を解説する

新約聖書注解書シリーズ

岸 義紘 著 全 27 冊(予定)

私にとって「一番の宝物」

長崎インターナショナル教会 牧師

柚之原 寛史

説教者本人が感動なしに説教原稿を作っても、会衆を感動させることなどできません。

「段取り八分」とはよく言いますが、説教を作る過程が非常に重要です。

たくさんさんの注解書や講解書の中で私の「一番の宝」は岸義紘先生が出されている新約聖書注解書シリーズです。

自らも興奮しながら、感動しながら学べ、とても丁寧で分かりやすいのです。

特に同シリーズの「ガラテヤ人への手紙」は第一章から「目からウロコ」でした。

私も講解説教のためのメッセージ作りをさせていただきましたが、喜び、緊張、感動の連続でした。

決して大げさではなく、危機的な日本の教会を救う手引きになるとも思いましたし、

信徒の信仰を飛躍的に成長させるためにも役に立つと思います。

新約聖書注解書シリーズはまだ全巻が出ている訳ではありませんが、全巻揃ったのを、首を長くして待っています。

皆さんにも全巻を手にしていただき、一ランク上の素晴らしい説教作りが大いに役立てていただきたいと思います。

今は「獄中書簡と牧会書簡」が順次登場するのを待ち焦がれています。

本書の狙い

パウロが信仰の自由を守り抜くために書いた戦いの書簡。救われるのは「信仰によってのみ」

このガラテヤ書を、講解説教者、自然科学者、音楽家等々さまざまな視点から読み解いていきます。

ある人は「楽譜」で、またある人は「詩」で、そして「物語」を用いて。

一つの視点、自分だけの視点だけではみえてこなかったものを、多角的視点から読み解くことにより、この「ガラテヤ書」を立体的に見つめることにチャレンジしました。

そのなかで、「ほんとうに信じるだけで良いのか」「何がわれわれを惑わせるのか」等の「ガラテヤ書」の主題を共に考え、見出していくことができれば幸いです。

次はどうぞ「あなた」の視点で、このガラテヤ書を読み解いて頂けます様に。

心から祈りつつ。

CONTENTS

- | | | |
|----|-----------------------------------|---------------|
| 02 | テキスト分解シート「ガラテヤ2章15-18節」 | 高清水 千秋 |
| 04 | 新約聖書注解書シリーズ 執筆のヴィジョン | 岸 義紘 |
| 06 | コミカルな視点で描く「ガラテヤ人への手紙」 | 荒木 徳之 |
| 16 | 楽譜「ガラテヤ人への手紙」 | ジョシュア 佐佐木 |
| 18 | 人生の分水嶺 | 穴澤 活郎 |
| 21 | しかし、本当に信じるだけでいいのだろうか？ | 横山 英実 |
| 22 | 志に生きる著者の聖書講解書に、
志を抱き学ぶ読者の一人として | 宮村 武夫 |
| 24 | 福音の自由から動かない人 | 武藤 和夫 |
| 27 | そんな時、あなたはその人を裁くことができますか | 兼松 一二 |
| 32 | テキスト分解シートの解説に想いを込めて | 高清水 千秋 |
| 34 | 牧師が薦めるこの1冊 | 中野 雄一郎・柚之原 寛史 |
| 35 | テキスト分解シート「ガラテヤ2章19-21節」 | 高清水 千秋 |

本書を読まれた方に

この冊子は、まだまだ未完成です。少しでも良いものを作り上げていくために、読まれた感想を編集部宛に送って頂けたら感謝に耐えません。ご意見・ご感想をぜひ、下記アドレス宛にお送りください。

祈りの家出版 mail : houseofprayerpub@gmail.com

Galatians 多角的視点で読み解くガラテヤ人への手紙

2016年3月12日 初版発行

2016年3月22日 第2版発行

編集・発行人 荒木 徳之

発行 祈りの家出版 mail : houseofprayerpub@gmail.com

発行所 〒245-0003 横浜市泉区岡津町1138-18

写真は執筆者の提供のほか、著作権フリー写真素材 PAKUTASO を使用させて頂きました。

聖書箇所 ガラテヤ2:19~21 『偉大な信仰告白 ~ 信仰聖化 ~ 』

テーマ 教会の危機的状況の中から生まれた最高傑作~その2~福音の最大の真理=[信仰聖化]
 パウロの偉大な信仰告白『ペテロよ。バルナバよ。福音の真理ここにあり』 その1【信仰義認】2:15~18

教会の内側から起こった最初の異端→「福音の危機・異邦人世界宣教の危機・使徒パウロ個人の危機」

「救われるためには割礼も必要」→パウロは偽使徒である→ユダヤ主義的・律法主義的教会指導者たちからの攻撃

パウロが手紙を書き送った背景

エルサレム教会の中に根強い勢力を持っていたユダヤ主義的律法主義的教会指導者たちがやって来て主張した2つのこと

①「**偽りの福音**」・・・キリストの恵みによりキリスト信仰だけで救われるのではなく、それとともに、割礼を受け、安息日を守り、モーセの慣習を守ることによって救われる。
 (1:6~9, 2:3~8, 16~21, 3:1~6, 4:21, 5:2~12, 6:12)

②「**パウロは使徒ではない**」使徒の条件(使徒1:21~22)【キリストと行動を共にし、且つ、キリストの復活の証人】を満たさない。それ以上に、教会の迫害者であった。
 →パウロの教えは正しくない → 自分たちこそが正しい。

●**アンテオケ教会愛餐事件** (ガラテヤ2:11~14)
 ペテロが食事会(=聖餐)から身を引いていき(未完了形)バルナバまでもがキッパリと同調した(不定過去形)
 →異邦人教会の否定と同じ → 世界宣教の危機

2つの十字架がある

キリストの十字架
 私たちの身代わりになんて死んでくださった主の十字架

歴史的な十字架
 入信の前後に教えられるのは、第1の十字架

私の十字架
 キリストと共に十字架につけられていっしょに死んだという意味の私の十字架

霊的な十字架
 信仰人生のどこかで第2の十字架理解に出会う

→ 理解に時間差

第2の十字架は、奥義でも極意でもない。第1の十字架の中に、同時に起こっていることであるから、その意味と効果を丁寧に解説すべきこと。

パウロの信仰告白

神様の恵み

福音の真理にまっすぐ歩く
 私はキリストと共に十字架につけられた
 私は神に生かされている

私は愛し私のためにご自身をお捨てになった神様の御子
 キリスト・イエスを信じる信仰

私は神に生きるために

律法に死んだ
 不定過去
 歴史的

十字架につけられた
 現在完了
 過去の継続

今生きているのは
 現在
 信仰による現実と未来

「信仰義認」 完全な救いからの出発

「内住のキリスト」 聖霊」 により聖化から栄化へ。

パウロの激しい失望・怒り・危機感の中で

逆転的に最高の福音理解と信仰告白が生まれた
 突然「私たち」という1人称複数形から「私」という1人称単数形に変わる

目的	パウロの一大目標【信仰義認の根拠】 この世に生身で生きる「 生の世界 」 私は 神に生きるために (不定過去接続法) iva thew zhsō 新しき永遠の生への確固たる出発	最重要事 生涯
宣言	出発は「 死の世界 」 この私は 死んだ 律法によって 律法に対して (強調) (不定過去形) (殺され) ↓ (具体的説明)	過去
根拠	キリストといっしょに私は 共に十字架につけられた Χριστ συνεσταύρωμαι (受動態現在完了形) 十字架を見上げれば キリストと一緒に 私はそこに共に死んでいる 律法によって律法に死んだのだ その効果や結果が 現在までも 継続していることを示す 過去の出来事 十字架の死 律法の奴隷 罪と死の奴隷 古き我との決別 罪人の古きサウロは死んでいる キリストと共に	継続
一大使命に生きる	恵みと信仰で 新世界に生きる 今日と未来の現実 復活のいのち この世に派遣されて、生身で生きることの使命 神様の子どもとされた 新しき私パウロが生きている キリストと共に	ローマ 6章 1~14 参照
キリストの命の宣言	到着は「 生の世界 」 そして 生きているのは もはや この私ではない δε ζω (現在形) ουκ εστι εγω (強調) 生きておられる 私の中に キリストが ζη (現在形) ενεμοι Χριστος (強調) キリストが私の中に生きておられるのだ	現在
根拠	今、肉体において私が生きて いるのは 私を愛し 私のために ご自身を死に引き渡された 神の御子に対する (不定過去分詞) 歴史的 「神の御子」が先行詞 それを形容	実存
信仰	信仰によって生きているのである 私は無にはしない この神の恵みを もし義が 律法によって得られるとしたら、 それこそ、キリストの死は無意味である	神の恵み 応答

決着のついた死からの出発 原理と現実の狭間を主と共に生きていく そのマスターキーは内住の聖霊

岸先生が神学生時代、ギリシャ語と宣教師を教えたのは私です。その後、誠実に学んで、聖書著者の心を読み出す注解書を書いています。



尾山 令仁



これほど実践的な注解書を私はほとんど知りません。その上、神学的で論理的です。説教者にとって実に役立つ助けです。

野口 誠

新約聖書学者A.シュラッターは、超有名。その逸話は興味深い。ある留学生がシュラッターに紹介されて、彼と握手をして言った。「シュラッター教授、お目にかかれて光榮です。あなたはヨーロッパで聖書の上に堅く立つ数少ない神学者の一人だと聞いております。」するとシュラッターはその学生をしばらく見つめて、こう答えた。「とんでもない！ 私は聖書の下にひざまずいているのです。」

岸先生とは高校3年生の春に出会いました。あれから半世紀(反省期)ここまで続けられ、このようなレベルの高い注解書を出せたのは、先生の努力もありますが、いつも上記のように「聖書の下にひざまずく」存在だからこそ上よりの驚くべき祝福にあずかれたと思います。

読者が、岸を離れて深みに乗り出すことを期待し祈ります。

友人代表 大川 従道



福音総合理解の眼でテキストを読む 新約聖書注解書シリーズ

JTJ宣教神学校 岸 義紘

B5版 全27巻

マタイの福音書	526 ページ	3100 円
ルカの福音書(上)	1-10 章 524 ページ	3200 円
ヨハネの福音書(上)	1-10 章 372 ページ	2000 円
ヨハネの福音書(下)	11-21 章 484 ページ	2700 円
使徒の働き	796 ページ	4900 円
ローマ人への手紙	744 ページ	4000 円
コリント人への手紙 I	222 ページ	1400 円
コリント人への手紙 II	258 ページ	1700 円
ガラテヤ人への手紙	400 ページ	2700 円
ヤコブの手紙 (福音総合理解の概説付き)	470 ページ	2500 円
ヨハネの手紙(I, II, III)	232 ページ	1400 円
ヨハネの黙示録	580 ページ	3200 円
ルカの福音書(下)	2016年秋刊行予定	以下続刊	(税別)
「福音総合理解」(主のたとえ話から福音の本質に迫る)	2200 円	

注解書の原本がイブ
ネットからみられます！

<http://jesustojapan.com/pdf/galabook.pdf>

20代から目標とした「講解説教」に取り組みつつ、「ああ、こういう注解書があったらなあ」と何度もつぶやいた、そういう注解書が本シリーズです。

牧師、伝道師に限らず「聖書を楽しむ、イエス様の心を探るすべての人」にこの注解書が用いられることを願ってやみません。

岸 義紘



ご注文は下記まで

Jesus To Japan 宣教神学校

TEL 03-3842-3412 FAX 03-3842-3415

<http://www.jesustojapan.com>

9784946544101

ISBN4-946544-10-0

C0016 ¥ 0E



1920016015005

House of Prayer Pub.

定価: 本体0円